

計画期間 令和8年度～令和12年度までの5年間

キャッチフレーズ

基毎月19日は「家事団らんの日」

現状と課題

1 食生活

- ・ライフスタイルや家族形態の変化、食の外部位化
→ 食生活の乱れ（欠食、孤食、個食、固食）
- ・加速するコメ離れ（消費量10万t減/年）
→ 日本型食生活の再認識

2 健康づくり

- ・子ども世代の心が元気な人の割合の増加
→ 前回から増加傾向／心と体の健康が大切
- ・健康づくり推進員の活躍
→ 担い手不足／重要性を再認識

3 食の生産と安全・安心

- ・多種多様な農産物
→ 生産者の高齢化／安定した出荷体制の維持
- ・食品の安全性
→ 食関連情報に対する理解

4 食文化

- ・魅力的な郷土食、郷土料理
→ 郷土食伝承に向けた取り組みの継続／後継者不足
- ・芋煮を作ることができる人は52.2%
→ 前回から5.2%の減少前々回からは19.0%減／伝承が危惧

5 地産地消

- ・日本の食料自給率38%
→ 食料供給側として地産地消をリード
- ・学校給食の町内産農産物使用割合43.2%
→ 生産者や納入業者との連携強化

6 食への意識

- ・食生活の基本は「家庭」
→ 食の基本習慣の習得（楽しみ、あいさつ、作法）
- ・おにぎりデー、弁当の日
→ 学校での体験など取り組みの継続や発展
- ・環境への配慮（食品ロス、SDGs）
→ 「もったいない」／持続可能な取り組み

具体的な取り組み

ライフステージごとの食育・地産地消

- 食習慣等は長い時間をかけて形成される
- 生涯にわたり健康で楽しく過ごすためには、ライフステージごとに「食」や「農」に関心を持ち、学びながら生活することが大切

- 『子ども期』 … 生活や体験により、食や農の基礎をつくる時期
(例：おなかが空く生活リズム、食事の手伝い)
- 『働き盛り期』 … 健康への関心を高め、食や農を実践する時期
(例：仕事や家事と食生活のバランス、郷土食の実践)
- 『高齢期』 … 食や農への理解を深め、次世代へ伝承する時期
(例：体調に合わせた生活、技術や文化の伝承)

生活シーンに応じた食育・地産地消

- 日々の暮らしの中で食育・地産地消を実践していくためには、生活シーンに応じ、それぞれが協力しあいながら取り組みを進めることが大切

- 『家庭』 … 食習慣や味覚形成に大きな影響をもつ
→ 家族みんなで食に関する知識を高め、子孫へ継承
(例：農ある暮らし、地域行事への参加、家族団らんの食事)
- 『学校』 … 子どものころの体験や学習が重要
→ 共同生活や体系的な学習、学校給食の取り組み
(例：おにぎりデー、弁当の日、給食への地元食材の活用)
- 『地域』 … 食文化は行事や風習とともに形成／消費者と生産者の相互理解
→ 地域ぐるみの取り組み、食や農の体験の場（信頼関係構築）
(例：6次産業化の推進、「SHIRATAKA RED」の推進、郷土食伝承事業)

食育・地産地消を進める実践

- 「家庭」や「地域」の役割がより一層重要
→ 家庭でも実践しやすい取り組みを推進。地域でも郷土食伝承する取り組み
- 『家庭菜園』 … 「農」身近に体験／最小単位の地産地消の実践
- 『SNSの活用』 … 新たな情報発信スタイルの形成
- 『地域行事で郷土食の提供』 … 地域行事で郷土食を伝承する取り組み

基本理念

豊かな自然と農ある暮らしに感謝し、健やかな心と体を育み、笑顔かがやき、未来へつなぐ食文化のまち